かぐや姫の昇天

帝もたびたびかぐや姫を宮中に迎えようとされましたが、かぐや姫は応じません。やがてかぐや姫は月を見ては嘆き悲しむようになり、翁と嫗に、自分は月の都の者で、次の十五日に月からの迎えが来ると打ち明けます。※八月十五日の夜、帝は二千人の兵士を遣わし、翁の家を守らせていました。

かかるほどに、宵（イ）うちすぎて、※子の時ばかりに、
こうしているうちに、宵も過ぎて、子の時頃に、

家のあたり、昼の明さにも過ぎて、光りたり。
家の周囲が、昼の明るさ以上に、光った。

望月の明さを十合せ（オ）（ワ）たるばかりにて、
満月の明るさを十も合わせたほど（の明るさ）で、

ある人の毛の穴さへ見ゆる（エ）ほどなり。

大空より、人、雲に乗りて下り来て、

土より※五尺ばかり上がりたるほどに立ち連ねたり。
地面から五尺ほど上がったくらい（の高さ）に　立ち並んでいる。

内外なる人の心ども、物におそはるるやうにて、
（家の）内や外にいる人たちの心は、もののけに襲われたようになって、

あひ戦はむ心もなかりけり。
戦おうとする心も　なくなってしまった。

泣いて嘆く翁に、かぐや姫は手紙を書き、別れを告げます。天人はかぐや姫に天の羽衣を着せようとしました。

そのときに、かぐや姫、「しばし待て。」と言ふ（ウ）。

「衣着せつる人は、心異になるなりといふ（ウ）。
天の羽衣を着せた人は、心が（地上の人間とは）異なってしまうのだという。

物一言、言ひ（イ）おくべきことありけり。」と言ひ（イ）て、文書く。
（その前に）一言、言っておかねばならないことがありました。

天人、「遅し。」と心もとながりたまふ（ウ）。
じれったくいらいらなさる。

かぐや姫、「物知らぬこと、なのたまひそ（イ）。」とて、
ものをわきまえないことを、　と言って、

いみじく静かに、朝廷（オ）に御文奉り（オ）たまふ（ウ）。あわてぬさまなり。
たいへん　帝に手紙を差し上げなさる。　あわてない（落ち着いた）様子である。

※八月十五日…旧暦八月十五日は中秋の名月の日。　子の時…夜中十二時頃。
五尺…一尺は約三〇・三センチメートル。

重要語句

な……そ	……するな
いみじ	はなはだしい・たいへん

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 次の言葉を現代仮名遣い(づか)に直したものとなるように、解答欄(かいとうらん)に当てはまる言葉をひらがなで答えなさい。

物におそはるるやうにて

物に［　　　］

(2) 次の言葉を現代仮名遣いに直したものとなるように、解答欄に当てはまる言葉をひらがなで答えなさい。

あひ戦はむ心もなかりけり

［　　］戦［　　］心もなかりけり

(3) ――線部「なのたまひそ」の意味を選びなさい。

ア なにかおっしゃいましたよ
イ なぜおっしゃるのですか
ウ おっしゃらないでください

［　　］

(4) 次の中から、本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 家の周囲にいた人たちは、物を使って天人と戦った。
イ 家の周囲にいた人たちは、羽衣を着て戦う心がなくなった。
ウ かぐや姫は、周囲の人の心が変わる前に手紙を書こうとした。
エ かぐや姫は、帝への手紙をあわてず静かにしたためた。

［　　］